

石川淳全集 第十二卷

增補 石川淳全集第十二卷

昭和五十年一月二十日第一刷發行

著 者 石 川 淳

發行者 井 上 達 三

發行所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話 東京 〇七六五一(代表)
振替 東京 四 一一二三

印刷 株式會社 精興社
製本 牧製本印刷株式會社

(分類)0395(製品)73112(出版社)4604

石川淳全集第十二卷

第十二卷目錄

夷齋饒舌

戰中遺文	二
太宰治昇天	三
雑談	四
ニセモノ記	五
石濤	六
首尾	六
歌仙	七
だから、いはないことぢやない	二〇
坂口安吾との往復書簡	一九
安吾のゐる風景	三六
ホテル氣質	五四
安部公房著「壁」序	五
安部公房君鐫印	六

五十音圖について……………二九三

蕪村風雅……………二九六

遠くから見たアルペール・カミュ……………三〇五

夷齋遊戯

南畫大體……………三二五

雜

政治についての架空演舌……………三七五

ことばに手を出すな……………三八六

寄酒祝……………四〇五

自轉車とカボチャと……………四〇七

すだれ越し	一六四
一虚一盈	一六六
人生ノート	一八三
墓とホテルと	二〇三
京傳頓死	二〇九
古畫 烏鷺覺贗奥儀 評判	二二四
日本語と漢語	二三四
家寶 文化焼底割釜 拜見	二四一
蜀山斷片	二四六
六世歌右衛門	二四九
敗荷落日	二五三
獨立の精神について	二六一
秋成私論	二六九
樊噲下の部分について	二八〇
初芝居三ツ物	二八三
自由について	二八五

横綱の辯.....四一〇

京都ふらぶら.....四一一

一冊の本.....四一四

わが小説.....四一七

夷齋遊戯

芝居.....四二三

宇野浩二.....四二五

十日の旅.....四二七

畫譚鶏肋について.....四二九

細香女史.....四三〇

ドガと鳥鍋と.....四三四

即興.....四三五

讀まれそこなひの本.....四三七

武林無想庵.....四四〇

スカバン.....四四三

小といふ字のつくもの	五四六
文學賞	五五五
レス・ノン・ヴェルバ	
車	五六五
禪	五七四
道具	五八三
居所	五九二
型	六〇二
アメリカ村	六一一

夷齋饒舌

戦中遺文

いくさのあひだ、わたしは新潮にみじかいエッセをほんのすこし書いたことがあつた。その雑誌はとうに焼けてしまつて、わざわざ捜さうといふ料簡もなく、今までに刊行された拙文の集には一つも収めてない。それどころか、むかしの反故なんぞは、なにをのたくつたものやら、當人がわすれてゐたくらゐである。しかるに、ちかごろ、わたしはむかし書き捨てたものごとをいくらかおもひ出さなくてはならぬといふ事情があつて、しぜん右の焼けた雑誌のことをおもひ出した。そして、さいはひに新潮社の倉庫に保存された新潮合本の中から所要の巻を借りることをえて、ひとがわたしのわすれてゐた舊稿を筆寫してくれた。それは三篇あつた。

ここにそのことを書くのは回想のためではない。昨日の回想の中に、むしろ今日を見るために

ある。さういつても、政治なんぞといふアホな見世物と附合ふこともない。わたしが見るのは、このアホな見世物のおかげで、文章がどれほどむちやな木戸錢をふんだくられたかといふ實例である。かつてみづから書いたものに於て、今日になれば、わたしはどうやら冷静に、おそらく公平に、そのかくれたユガミを計算することができるようにおもふ。文章の書き方。いくさといふ條件にしばられたにしても、それはわたしみづから書くことを撰んだものに相違ない。なにをどう書いたか。このちつぽけな文章體驗には、たかが芥子粒ぐらゐの目方にもせよ、ともかく當時のわたしの生活の一端がかかつてゐる。

新潮昭和十七年七月號。拙文は「散文小史。一名、歴史小説はよせ。」と題してある。原稿四百字詰にて十五枚。この年五月にはすでに文學報國會といふものがでつちあげられて、文章は經國の大業か、下男の下ばたらきか、ナニガナンデモ奉公しろと、壯士が演舌をぶちまくつてゐたころであつた。賣文業者は書くものに窮して歴史小説と稱する珍種の栽培のはうにかたむきかけたが、わたしも業者の一人として、渡邊華山の傳記をおとな用とこども用と二冊（やれやれ、これで食へたか食へなかつたか）作る仕儀になつた。さういふいきさつで、おそらく新潮はわたしに歴史小説について書くことを求めたのだらう。拙文の内容はしばらく措き、どうもわたしは文中最いやに殺氣だつて馬琴をのしることににはなはだ急であつたと、今はかへりみられる。馬琴は今でも依然として大きらひだが、このときの攻撃よりは性急すぎて、文學論として十分に筋が通つてゐない。すくなくとも、戦術としてうまくない。説得力があつたかどうか。じつは、當時わたしは馬琴に於て他の一箇の敵を見てゐた。軍政府發行の道義といふやつである。道義と奉公と

の二ツ玉をくらつたせぬか、わたしはむらむらと殺氣だつてゐたものらしい。殺氣は文章のうはべに浮かせてはならぬものだが、こまつたことに、當時をおもひ出すと、わたしは今でもむらむらして来る。

反對に、おなじ文中に、わたしは蜀山を褒めあげることにやつぱり性急すぎた。馬琴をたたいた釣合上、かうしないとほなしの天秤がくるつたではあらうが、これは文學の兵法とはいへない。このむらむら流の書き方では、わたしはどうしてかう蜀山に凝つたのか、氣が知れないやうに見える。おもへば、蜀山のことはほかにも書いた。凝つてゐたことは、いくさのあひだの生活上の事實であつた。わたしはひそかにへたな狂歌を作つて、それが日常の癖にまでなつてゐた。ただし、このうはさつぱり賣物にならなかつたから、わたしの生活の天秤はのべつにくるひどほしであつた。

新潮昭和十七年十一月號。「善隣の文化に就いて。」十二枚半。このころ上野の博物館に滿洲國寶展覽會といふ催しがあつて、拙文はそれを見たあとの雜感をしるしてゐる。ものがものだから殺氣だつこともないが、あとあちは苦澁といふ印象をあたへる。中に一ところ、何とも不可思議な文句が出て来て、今日のわたしの目をおどろかした。

「紙數がないから、さつそく假定を掲げる。すなはち、日本文化を關係諸文化の王として立てるといふ、必ず實現すべき單純明白なる假定である……」

拙文はこの後の部分に於て、文化の統一なんぞはできない相談といふ意味のことを書いて、はじめの「假定」がしぜんに破れるやうにはほのめかしてあるから、當時の狀況判斷をもつていへ

ば、ふつつかながら、論旨はまあまあと大目に見ることもできるだらう。そのはじめにあたつて、この「假定」を立てておいたのは、わたしの政治的ゴマカシであつた。ひいき目にさうおもつて見れば、いくぶんは反語的意味が無いともいへまい。しかし、この書き方のかぎりでは、ゴマカシは迎合に似て、謂ふところの戦時色をおびて、ちよつとセンパンのうたがひがありさうではないか。「必ず實現すべき單純明白なる」とはなにか。この表現は決して「單純明白」でない。こゝは「實現するはずのない曖昧むちやくちやな」と書くべきところであつた。それがまさに當時の實狀にはかならなかつた。この「假定」の書き方にゴマカシがあつたために、あるひはゴマカシ方が拙劣であつたために、てきめんに、その後につづく文章まで齒ぎれのわるいものになつてゐる。なにゆゑに、わたしはゴマカシを書いたか。それはありのままに書くだけの勇氣がそのときわたしに缺けてゐたからであつた。かう書いたのはわたしにちがひないのだから、これをいくさのせむにはしない。さういつても、もしいくさといふものが無かつたとしたらば、わたしは決してかう書くことをおもひつきもしなかつたであらう。いくさがわたしの文章におよぼしたものと大きいユガミといへば、前後にこの文句一とこゝろでないかと、わたしはおもふ。ウソにはウソのつき方がある。小説家として、恥辱であつた。

新潮昭和十九年八月號。「歴史小説について」十四枚。かさねて歴史小説である。おそらくこれよりすこしまへに、わたしは身すぎ世すぎのために「義貞記」といふ本を書いてゐたので、この再論におよんだのだらう。ところで、奇妙なことに、この拙文には殺氣だつたところが無い。また政治談ではないのだから、ゴマカシの必要も無かつた。すなはち、うはべは平靜を保つてゐる